

【暗証聖句】

「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」ローマの信徒への手紙 5 章 5 節

【日・大きな絵】

ローマの信徒への手紙 8 章 22 節「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」

この世界は自然も人間も、すべての被造物が今日まで呻き、共に産みの苦しみを味わっていると聖書は言います。様々な悩み苦しみに呻いているのは人間だけではないのです。自然界も呻いている。地震や台風などの自然災害は、自然界の呻きなのかもしれません。しかし、それは産みの苦しみであり、やがて来るべき素晴らしい出来事、すなわち罪によって汚れたこの世界が再創造されるまでのことです。人間も自然も、天も地も、新しくされる日が来るのです。そのための産みの苦しみを、被造物全体が通らされているのです。だから、目の前で起きていることだけを考えるのではなく、もっと大きな視野で物事を見ていく必要があります。この呻き苦しみの原因は、この地上ではなく天にあると聖書は明らかにしています。ヨハネの黙示録 12 章 7 節～9 節「さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた。」

天で戦いが起こった。サタンと墮天使たちが、神様に反逆したのです。この天で起こった戦いは、やがて舞台を地上に移します。これにより地上に罪がもたらされ、悩み苦しみが始まったのです。聖書の中には、多くの人の呻き苦しみが記されています。紀元前600年前後に書かれたと言われるハバクク書は、「主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに、いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに「不法」と訴えているのにあなたは助けてくださらない」（ハバクク書 1 章 2 節）と訴えています。ハバククが生きた時代は、イスラエルにとってまさに激動の時代でした。アッシリアやバビロン、エジプトなどの大国に翻弄され、主の民は公然と不正を行っているしまつです。ハバククはこのような状況に対し、主に、「いつまで」「どうして」と苦悶し続けていたのです。ところが神様からの答えは、エルサレムを直接助け導くのではなく、カルデア人すなわちバビロンによって民を裁くというものでした(1:5～10)。まもなく一部の民はバビロンに捕囚となり、神の都エルサレムは完全に崩壊してしまうことになるのでした。このような悲劇をなぜ神は許されるのか。これは、神様が描いておられる大きな絵を見ないと理解できるものではありませんでした。主はハバククにこう語られます。

ハバクク書 2 章 3、4 節「定められた時のためにもうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

「定められた時のためにもうひとつの幻がある」。ここに神様が描いておられるもう一つの大きな絵があったのです。直接的には、神の御手がバビロンに伸びて彼らを裁き、捕囚とされた民をエルサレムに帰還させ、もう一度神殿を再建させる時が来るということだったのですが、同時に、「それは終わりの時に向かって急ぐ」と、終わりの時を予兆させるものでもあったのです。ヘブライ人への手紙 10 章 37、38 節を見ると、「もう少しすると、来るべき方がおいでになる。遅れられることはない。わたしの正しい者は信仰によって生きる。もしひるむようなことがあれば、その者はわたしの心に適わない」と、「わたしの正しい者は信仰によって生きる」とのハバククの預言の言葉を引用し、「終わりの時に向かって急ぐ」との言葉と主のご再臨を結び付けて語っています。歴史は繰り返すと言われますが、バビロン捕囚とエルサレムの帰還は、終末時代の予型なのです。終わりのとき、不法が世界に満ち、自然災害が多発し、主の民は不安の中で、「主よ、なぜ、いつまで」と祈られることでしょう。まさに、コロナ禍にあってそのような祈りの毎日を今私たちは通らされています。しかし、コロナだけを見るのではなく、もっと大きな絵を見なければならぬのです。主は間もなく戻って来られます。そのときこの世界は裁かれ、主を信じるものたちは新しい世界へと旅立つのです。ヨハネの黙示録 18 章 2 節に、「倒れた。大バビロンが倒れた」と書かれています。バビロンがメド・ペルシャによって倒され、捕囚の民が帰還できたように、悪の巣窟バビロンが倒れ、天の故郷に帰還する時が必ず来ます。それは決して遅れることはないのです。今私たちに言えることは、「神に従う人は信仰によって生きる」ということです。主を信じ続ける者は救われるのです。

【月・私たちの父なる神】

オズワルド・チェンバースは「あなたは神が何をしようとしておられるのかを主に尋ねたことはないだろうか。神は決してしようとしておられることをあなたに告げはしない。神はただ、神がどのようなお方であるかをあなたに示すだけである」と言っています。ヨブは突如襲った苦難の意味を神に問いましたが、神は答えてくださいません。妻は悲しみと苦しみのあまり、「神をのろって死になさい」と絶望的な言葉を口に、友人は「何か罪を犯したからだ」とヨブを責めます。しかし、ヨブは「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」（ヨブ記 2 章 10 節）と言い、最後まで主を呪うような言葉を口にしませんでした。次々に襲い掛かる災いにも増してヨブを苦しめたのは、苦難の意味がわからないことでした。意味さえ明らかにされたら、苦難も耐えられたかもしれません。しかし、最後まで神は苦難の意味について、口を

閉ざしたままなのです。ただ、神は最後まで沈黙されていたわけではありませんでした。やがてヨブの前に現れて、天地創造を通して、父なる神様がいかに偉大な方であることを示して行かれます。ヨブは圧倒されます。そして、自分はいかにちっぽけな存在であるかを悟られるのです。すると、いつのまにか、神様に対して「なぜ」と問う必要を感じなくなるのです。この大なる方を信じ、すべてをゆだねることが最善であることを知ったからです。同様のことが、私たちの人生にも起こります。そのとき、私たちはどうするのでしょうか。

【火・父なる神の臨在】

苦難の中で、私たちは神様が見えなくなってしまうものです。神様が遠く離れてしまったように感じるのです。まるで見捨てられてしまったかのようです。私たちが罪を悔い改めないからでしょうか。私たちがあまりにも不信仰だから、神様はあきれて私たちを見限ってしまったのでしょうか。ある人が言いました。「神が遠くに思えるとき、離れたのはどっちだろうか」。私たちが神様から離れることはあっても、神様が私たちから離れることは決してありません。イザヤ41章の力強いみ言葉が、そのことを語っています。

10 節「恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢力を与えてあなたを助け、わたしの救いの右の手であなたを支える。」 17 節「…イスラエルの神であるわたしは彼らを見捨てない。」

神様は、いつも私たちと共におられるのだと、聖書は繰り返し語っています。この事実を決して忘れてはなりません。

【水・父なる神の私たちのための計画】

バビロン捕囚とされた人々に語られた主の言葉は、苦難や試練の中で、私たちが覚えておくべきことです。

①エゼキヤ書 29 章 4 節「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、エルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に告げる。」

ここにエルサレムからバビロンへ捕囚として送ったのは主なる神であると告げられています。どのような試練や苦難であったとしても、それを許され、導いておられるのは主なる神様なのです。理由はわからなくても、主が導いておられることを信じることによって私たちはそれに耐えることができます。そして、エゼキヤ 29 章 11 節には、その計画は「平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである」と書かれています。これを信じるのが大きな力となるのです。

②エゼキヤ書 29 章 7 節「わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。」

次に、たとえそこがバビロンのような町であったとしても、神様は変わらず働かれるのだから、そのところでの平安を祈り求めるように教えられています。苦難の中にあつて平安を保つことは簡単ではありませんが、だからこそ、平安を祈り求める必要があるのです。

③エゼキヤ書 29 章 10 節「主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。」

永遠に続く苦難はありません。神様の試練には定められた時があります。その時が満ちれば終わります。忍耐が必要ですが、定められた時があることを知ること、私たちの力となることでしよう。

【木・父なる神の鍛錬】

ヘブライ人への手紙 12 章 5、6 節「また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけぬ。主から懲らしめられても、力を落としてはいけぬ。なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」

ヘブライ5章5～13節にかけて、鍛錬という言葉が10回出てきます。この言葉は「教育」を意味する言葉で、神様は信仰の学校で私たちを教育される。その中に試練や苦難が含まれているのです。「いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか」と12章7節とあるように、すべての鍛錬は、父なる神様から来ています。父親は子供を鍛えるものです。「霊の父は、わたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです」(ヘブライ12:10)。それは子供が幸せな人生を歩み、立派な大人になってもらいたいからです。しかし、人間は不完全で、それが不十分であったり、自分勝手だったり、間違っていることも少なくありません。それに対して父なる神様は、私たちが神様のように聖なるものとなることを目的として鍛錬されます。それこそが私たちにとって本当の益となるからです。そして、その神様の鍛錬は完全なのです。鍛錬というのは当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるでしょう。しかし、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、「義という平和に満ちた実を結ばせるのです」(ヘブライ 12 章 11 節)。神様が私たちを鍛錬するとき、重要なことがあります。それは、「信仰の創始者また完成者であるイエス様から目を離さない」ことです。そうすれば試練を乗り越え、信仰の階段を一段上がることができると聖書は約束しています。

ヘブライ 12 章1, 2「…すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。」

イエス様は私たちの信仰を始めてくださった方であり、同時に完成させてくださる方でもあります。だから、そのイエス様を見つめながら、これからも信仰の階段を一段一段上がっていきたいと思います。